

言語学ゼミナール XI (2009.07.11) 報告

前回までの推論の大切な問題は、使役性他動詞の認識とサセル型形態統語的動詞複合の認識では脳内処理の仕方が違うのではないかということでした。もしこの推定を一般化できるとすれば、語彙的情報と形態統語的情報が別の仕方で脳内処理されているのではないかと想像してもよい、それらの意味の形式構造もまた同型ではないかもしれないということになります。そこで今回はそもそも動詞の語彙的な意味とはどんな形をしているかという問題について考えてみたいと思います。

次の表は Pukhta 2003 の漁労語彙の一部です。

- | | | |
|----|------------------|-----------------|
| 1 | <i>coŋəŋdʲ</i> | 漁をする |
| 2 | <i>rindidʲ</i> | 氷下釣りをする |
| 3 | <i>kʰezdʲ</i> | 網を仕掛ける |
| 4 | <i>taxtldʰ</i> | 網で魚を捕る |
| 5 | <i>lɔrkudʲ</i> | 浮き網で魚をとる |
| 6 | <i>mər χuptʲ</i> | 定置網を仕掛ける |
| 7 | <i>jilyudʲ</i> | 流水到来後帰るように漁獵に行く |
| 8 | <i>kʰəptʲ</i> | 流水凍結後帰るように漁獵に行く |
| 9 | <i>mu vəyidʲ</i> | 流水時魚を捕る |
| 10 | <i>kʰerqodʲ</i> | 魚を釣る |

問題は7の *jilyudʲ* と8の *kʰəptʲ* です。ともに1単語では派生語ではありません。つまり元になる類語がありません。Sabel'eva/Taksami 1970の辞書には *jil k udʲ* という語が登録されています。「帯を超えて持つてくる」の意味だとあります。また *kʰəptʲ* に似た語では *kʰəprdʲ*

があって、「残る、留まる」の意味であるといえます。これらの語とどういう関係があるかは分かりません。また氷 *lar* という語と関係のないことも面白いところです。

これらの語の意味は、生態学的に規定された固有の動作概念です。ちょうど「かも（醸す）」のような語彙で、分解・派生ができません。そのような概念と固有の音型がセットになってこのような語彙ができています。ここで問題が二つあります：

- (1) このような概念は基本的に脳内長期記憶装置に納められていると考えていいか。
- (2) この概念の意味記述はどうするか。つまり、その固有の「内的言語形式」的な特性にはどのような記述をするべきか。

これらの問題にアプローチするための例題として、国立国語研究所『日本語教育のための基本語彙調査』1984（志部昭平編）からおもしろそうな動詞をいくつか選んでみました。

「まぎらす、なおる、はめる、ひたす、届ける、はやる、はずれる、もぐる、かかげる、編む、まとめる、つらねる、ゆがむ、めくる、ずれる、削る、あふれる、ふりむく、うつむく、まごつく、あまえる、惜しむ、さとり、またぐ、なでる、吐く、しくじる、おだてる、ごまかす、なぐさめる、けなす、からかう、賭ける、あずかる、たがやす、炒める、漬ける、ゆずる、あずかる、綴じる、映える、滲む、錆びる、ゆでる、むす、実る、くびれる、腫れる」など

これらはどれも、さらに小さな意味要素には分解できないような一つのまとまった概念の表示です。このような概念をカントにならって統覚的概念と名づけておきましょう。

参考：

「およそ一切の思惟より前にあたえられ得るところの表象は、直感と言われる。それだから直感における一切の多様なものは、かかる多様なものがあたえられるところの主観における『私は考える』という意識に必然的に関係している。ところがこの『私は考える』という表象は自発性の作用である、従って我々はこれを感性に属するものと見なすことはできない。私はこの表象を純粹統覚 (Apperzeption) と名づけて、経験的統覚から区別する、あるいはこれを根元的統覚とも名づける。かかる統覚は『私は考える』という表象を産出するところの自己意識〔自覚〕であって、もはや他の統覚から導来せられ得ないからである。」(カント『純粹理性批判』(I 先験的原理論第一部先験的分析論第一編第二章「純粹悟性概念の演繹について」第二節「純粹悟性概念の先験的演繹」〔篠田英雄訳 岩波文庫版上 p. 178〕 () 内は金子の補填

.....

この言語学ゼミバールも11回になりました。最初の出発点は、サイトを運営する上で基本的に大切な言語学の知識を共有しようという意図に従って、この数十年間によく語られてきた言語研究の考え方を順を追って反省してみようというものでした。最初に選び出されたのは「深層構造」でした。この生成理論の基本的な概念は、いま思い返してもやはり結構むずかしいものでした。そのために何度か横道にそれながら、50年に及ぶ言語研究の主な論議を辿ってきました。それは決して無駄足ではなかったと思います。なぜなら、とりわけ昨今「語彙分解」と称して特に動詞の意味の要素を単純な論理式に分解する人たちがいます。その行為の行き着く先にどれほど思いを致しているのか不審なほどです。その問題の結論としては今回XI回にまとめた古い論議が役立つのではないのでしょうか。

こうして「深層構造」論議から出発したゼミナールも一応の区切りにきたように思います。そこでこの道筋の論議はここで中断して、これからは新しい社会言語学的な論点に移りたいと思います。

次回は夏休みに調査研究にいらした方の報告をお願いします。またその次はサロンの準備としてアイヌ語の話しをしましょう。その後からは「Multilingualism 多言語状況」の問題を順次論議していきたいと思います。